

氏名(生年月日)	モリ ヤマ タカ ヒト 森 山 能 仁
本 籍	
学位の種類	博士(医学)
学位授与の番号	乙第 2292 号
学位授与の日付	平成 16 年 12 月 17 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	The effectiveness of steroid therapy for advanced IgA nephropathy and impaired renal function (腎機能低下を伴う進行性 IgA 腎症に対するステロイド治療の有効性)
主論文公表誌	Clinical and Experimental Nephrology 第 8 巻 第 3 号 305-313 頁 2004 年
論文審査委員	(主査) 教授 二瓶 宏 (副査) 教授 小田 秀明, 堀 貞夫

論 文 内 容 の 要 旨

〔目的〕

IgA 腎症に対するステロイド治療は一般的に、クレアチニン・クリアランス (Ccr) 70ml/min 以上、蛋白尿 1.0 g/日以上および組織学的に活動性病変を有する症例に対して施行される。しかし、すでに腎機能低下を認める IgA 腎症に対する治療法は確立されていない。

今回我々は、進行した IgA 腎症に対するステロイド治療の有効性を検討した。

〔対象および方法〕

対象は生検時の Ccr が 70ml/min 以下の IgA 腎症 60 例である。組織学的に活動性病変を有し、ステロイド治療を行った 20 例をステロイド治療群 (S 群) とし、非ステロイド治療群 (NS 群, 40 例) と腎生検所見および臨床所見・経過を比較した。腎生検時の血清クレアチニン (Cr) 値は S 群 1.21 ± 0.44 mg/dl, NS 群 1.27 ± 0.33 mg/dl, 蛋白尿は S 群 2.33 ± 1.54 g/日, NS 群 1.39 ± 1.87 g/日で、両群間に有意差はなかった。

〔結果〕

最終観察時の蛋白尿は S 群 0.94 ± 1.49 g/日, NS 群 1.21 ± 2.16 g/日と S 群で有意に減少し、血清 Cr 値は S 群 1.79 ± 7.94 mg/dl, NS 群 2.51 ± 3.43 mg/dl と NS 群で有意に上昇した。更に S 群 20 例を腎機能保持群と腎機能低下群に分け、臨床所見および組織所見を検討した。両群の病理組織所見に有意差はなく、腎機能低下群で腎生検時の血清 Cr 値、蛋白尿が有意に高値を示した。

〔考察〕

一般的にステロイド治療が無効とされる Ccr 70ml/min 以下の IgA 腎症においても、組織学的活動性の高い症例は、ステロイド治療により蛋白尿が減少し腎機能が保持しうると考えられた。しかし、血清 Cr 値 1.6mg/dl 以上、Ccr 50ml/min 以下および蛋白尿 4g/日以上の症例ではステロイド治療無効例も存在し、対象を慎重に選択する必要がある。

〔結語〕

腎機能低下 IgA 腎症に対しても組織学的に活動性の高い症例に対しては、ステロイド治療が有効であると考えられた。

論文審査の要旨

IgA 腎症に対するステロイド治療は、蛋白尿が 1g/日以上、クレアチニンクリアランス (Ccr) が 70ml/min 以上、かつ組織学的活動性を有する症例に対し有効とするのが一般的である。

今回は、腎生検時の Ccr が 70ml/min 以下の IgA 腎症 60 例を対象に、進行した症例に対する有効性を検討した。腎生検組織で活動性を有しステロイド治療を行った 20 例 (S 群) と、非ステロイド治療群 (NS) とで臨床所見と組織所見を対比検討した。腎生検時の血清クレアチニン (Cr) 値は S 群 1.21mg/dl, NS 群 1.27mg/dl で、蛋白尿は S 群 2.33g/日, NS 群 1.39g/日で両群間に差を認めなかった。最終観察時の血清 Cr 値は S 群 1.79mg/dl, NS 群 2.51mg/dl と NS 群で有意に上昇し、蛋白尿は S 群 0.94g/日, NS 群 1.21g/日と S 群で有意に減少した。S 群で腎機能が低下した例では腎生検時の血清 Cr 値, 蛋白尿が高値であったが、腎組織所見には有意差を認めなかった。

より進行した IgA 腎症に対するステロイド治療の有効性を示した臨床的に価値ある論文である。